新板
絵入

世間娘容気

二

特
遠13
653
2

只誠堂
好文堂
遠へ門
號 653
巻 2

世帯持くらを銀より命と惜まぬ侍の娘
上野の櫻咲て人は内儀の宴井自慢あり娘は母の親ひき
らうてもとゝの美形れ袴のさるをもいとゝど花のかんばせ
見まく冷の世の人心ちぶつまと爲者さへよく連て歩
あるきものおもあるゝど美男は果報の養とのべ廣く人をえ
らびて。さらぬ仕合よ事まつて裏。氏なりてもあく自
ふるゝ美形の一徳嫁入雀の姫は廣ひ和と同じ名れい花をかざ
つくれをとるもまくうゝど。なる美服所の事和泉井まを部と
て。育後人のむとよ。店廣ハを代まりなくく毎日の稽遊山ゝよ
を樣の蜜よ。桜の前よ。ちいさをんなくゆうん事とはをれ事社
まゞつまふうをひうけくれ海ゝ女中とあらは着よをれあるを

明治三六年九月十一日購求

どもみつろくくらゐなるにやんてむり〜廉ゆよ重京のわひ段
ゆり神のちいさとそそまく巻ハ十六どろりとかんへて旬
薗の娘面神いへどろりるくよ兎切内俗ちやんとて猪ほめ
うどちりとハ方をろつてろむまれつさ毎親らくさへくびか洗
濯せ〜日暮くうる和ろて娘の扉ようつくく孤関もつ〜ど男の
色をきいくいそでやよ毎ろまりの命ん神くく世界よ女房といよ
ものあれ娘ちゅどりどちろりよちづさ出入の巻ちわこりうつけく
宿元を見ろるふかいつ乃裏店かりくく模様けづりくを自を
をくる宰人をものく娘ゆあやを廉くれ代の島女ちゅがむり〜代
をそく朝夕れ茶をかくさ自をものづりく巻ろる宿ふ娘を
やーちひゆよりゆ世世を孫りふどりふ婦ようひををを代

きてをりかゝぬ命となりくゝ紀を月をろるゆりとけばさ夏
て海りくく和様をれ。夢命を代ちよ付方夏ゆれくさゆり娘
入乃眞美ろ義くらゝせくむりひとろを孫びひろひ入ろく
陽くいひつりりくれ。新文をけくく娘ちいくと事命かゝへ
ろりくせけるふ貧家よそをらぬを大さとが武士の姫とそ所人の
ゆとをちがひ形美でしくかりゆを織くさ業ゆろれ。多くれ
手代をもくく自とかづき。親里れひびくさ言くと推いひむと若
をちくて。へ氏ろ育とりへど姓ゆをとをわくり。命親れ中法
ゆる形気を継くく。輩の一家れ内像ちよ出合くをををくくを
ちりびをこる神をちく自孤と信ゆりくく人皆程姓とかんゆぬ
別深よちさがひりりををるゆ世界の妻れ仲でりくゆる時

書写の女房ないくとつまそ。懐中れうぎさまざまの
ものを女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ女ゝ
ぐさをんとうるべきようないくとの人なるつくさのとくるる新つきて。
なんとそもくいぶれおぐゝ者ゝ親方れゝ付ゝ雪ゝ乃
なるあいかくなつ。それ見物事ゝ乃産乃紙のかゝ女れんつ物
ふあゝとゝ様さう尚世の所義ぬ和ゝ出ゝ事をまとくく
不仕ゝ乃ゝ汚ゝ所をまて見ゝ人ゝるゝの娘れ乃ゝ事ゝ勿
論。海又ゝ世ゝ世ゝ世

まをわりとをぢてくみまんれ桐をうり果し時を付られ
てト　武事は生きさま武士乃ふあくまさうと矣ゝ事なり。まして
ふかくこの女房よ対ふくさまふこひうきまこかんまんせいと男ふ似
合ぬ浅間の動り。弱きうる猪頁あまこ女るれたまさうの附頁と
くるる利かわざあとふうーとて節紀州義は刀男みるけ
まこうりて思づりとりまこ貞花の附よいもまいさだくねうろ
ゑーと猪つさう一勝。来国俊が前日様をしてうろ鍋の拍ん組
藤の付来信州地義所の合義ようをを強と武用ろう甲巻を
引捨で一人ふこうまつて仏力をとつく大勝を三度を時よりう上
ちひあうう。武勇は生まれとあうう。ゆふ言石の力をを豪町
を切ゝ力をよこさふとあとふ。月ゆ神は和裏の様はうをよ

つよかるひと洞をとるゞ。今ふもとと川ぬのてありまりばこ
うやはまゆとまゆ卯二階へ地あうりあり戸をさうく
白ふ親ふ強ゝさふ大汗生うふ拍ふくくたふひること
とうりるもと高部はものおどろさ弛あつまゝくおいくをさゆくる
ゞあけるふむゆもゞそこるひとあるかうふるふ片物若ふ志の小と
いうとの。女は分ふかうる疵を付ふれてゞふ姫無ゞるゆゞとゆく安
ゞ紀橋ふ人ゝ孫ゝ町中ゞたのこ石をを寄月行事ふ志うは个
移ゞをてをゞゞ。ゞ。ゞ。

れこの三つきて女あを仕舞そういふるんどいとゝあこいろう変
三寸をひゝあり〳〵てゝとやゝ狂
前生でわまとをてあこ報ひでうるあゝふとゝひあこてあ主乃子
あらふやうて和う〳〵晩を女房れさぎんとうこゝうとそ六家のつ
まゝせんこゝうゝ色てゝ山神乃強合ちのけぬれけうとゝかゝて
強侍乃娘が手ぬるひ升仕事ゝ主ゝこゝ物所と
て升ゝれさゝて女よ切米やうゝかゝとれわまゝ繼ぬれ事ゝうゝ
ちぬゝとれ待なゝうゝびいふ家人の娘まて美妻ゝそゝらうれを
とて自身糸升拵ゝ手づゝ物すゝぬゝて事いこゝうぬを侍
れゝうゝ自分拵をもぬゝふ女ゝちんゝてゝあづうゝ取ゝそづゝひ
と眼色かゝれハうれゝれゝふ事てゝうひゝの

如あゝもあゝふゝのゝちんの自分ぬゝらゝゝやゝうゝやゝれゝが
ゝうひとはゝをゝめゝゝきゝんゝをゝうゝてゝゝのゝとゝゝゝとゝて女乃
ゝうわゝざハゝゝゝてゝ生生事れ他ゝゝゝゝ大裏の座ゝゝ家ゝを取
減元ゝゝ家れゝうけゝゝゝ色鐵霜蟹乃ゝを見人二月若ゝ乃接
接れ事ハいゝどゝて奥見屋の岩井大和をゝびゝうゝを云乃時ふ
花見樓をあゝゝ山稼樂ゝを見ゝれと奥ゝれゝゝゝゝゝ事
乃強ゝうの役ゝうゝゝれゝ百ゝ千乃ゝ恵美屋商人乃
いゝ目ゝれハ見れをゝゝめゝ代小若まで後日酒ゝゝんゝて門のア
れれゝいてあゝをゝゝゝゝゝまゝゝ夫ゝて郎をゝゝゝ強乃癖ハいゝゝ
ゝりをゝんゝ〳〵西井ゝ喜ゝゝりゝてゝゝあゝれ新盛八九人ゝゝく
ゝゝ〳〵亭ゝをゝゝめ山若下男下女ゝゝ縄ゝゝゝ張ゝゝゝ

みて大男打よかゝめつけ中ゝ　ゆとの女解の代一人とゝらど
ひるもとゝ刃物をもつめて重振のみ前まつもぐて御ゝと申間
ちゝくを金元をもつとゝ　ちもちくハて今さゝ　ちろとりと白船い
兵代目ゝ　ふるひて　長刀　居宿の　戸　掛ふも入てごうろ　義の中
ゆもいく　名のかゝ　ゝ　ゝ　

はんぶんのこゝろいせのこゝろ　ぜんぜんひいきの
をとて　弱ゝとつゝり髪ゝて首代よ様ゝそきてう打掛
て　遣ゝるひ門れ　ゝくとあゝとれい身を性び目表ハ屠持よ
あゝひゝゝ今とゝふ今女房の徳わゝられ　家れ有ゝ
をゝつゝくわゝさたつまハ女房ゝ仕ゝ海異ゝ神もゝく　門の
蓋葉かゝゝ三分を九出ゝ　ゝゝよ紙屋の掛物のせていゝ
ゝゝゝハゝゝあゝよゝ　男とゝ生ゝ　ゝれ　ゝ
やゝれのゝくゝと生ゝ　ゝ人ゝ歌をんゝれ　ゝ悔れ　ゝ
ゝゝやゝ形ゝハ男れ一分をゝつゝれいせゝていゝ　ゝよ切腹
ゝゝれ縄目の恥辱をゝゝさゝゝゝゝ武士の法とゝつゝ三雑の仕
業ゝ腹ゝ義ゝ　ゝゝゝゝ　ゝ切腹ゝゝゝゝゝ世ゝ人ゝ

づゝゝと　ゝ会ゝゝ　ゝれ　ゝ生ゝゝれ　ゝ
て家ゝハ疵ゝ付ゝ　ゝゝゝ　ゝ後ゝゝゝ　ゝれ　ゝ
ふけゝれて町人れ　ゝゝ　ゝハ　ゝゝ　ゝ
会ゝハ　ゝ後ゝゝ男れ　ゝ
ゝゝゝゝゝゝ　ゝ
後ハ新れ　ゝ代　ゝ
ゝゝ　ゝゝゝゝ　ゝ
ゝゝゝゝゝゝ

小袖姿ゝ引ゝ　ゝていれぬ世性娘

今ゝ世ゝ風義ゝ　ゝ人ゝ　ゝ
縁ゝ　ゝ　ゝ花簪ゝ　ゝ
ゝよ能ゝ　ゝ世ゝ　ゝ廉ゝ　ゝ

大やうにんせうけのだかりうといわそろ〳〵。同じく銀と天釋迦
ようの往日出百文をうけ。唐屋まへの茶とかりて接かうの
まぐかんまんのうの西向の角ひと貫文を飲から乃
重銀をとりてみ。人やうの大やうの新つき肉桂の氷のこと炭
火おこして田楽いく〳〵うあるひそれ〳〵かれ乃人を
わざとうてこそ外代をたべふとあいてどそう湯まわ毎付色
大〳〵の山茶家立茶て喜の孫元中ぬさかく〳〵ちいでも方
つと大事あるをげめり。元ん和銀ふん年銀まいり。梅い出ぞねの
かいらく〳〵接ぎをとらせ。まおかうきらくとと世来さ
桂重れかふ茶屋へさめぐく。れ料理をひ付。桂だこうんの大人
小仏座を焼うけ。物日山とふせん。茶を喜天同そもこの色

物語れ茶れ茶思いてそ。内ふて。出ぬが備銀色茶れ日銀ぬ遠と銀
俵つけられ茶思ったりく〳〵佛檀の男ふとうぶ出をりむひとうとめ
てあるもきうとおもうとれ俵若ん天気がうんとときぎんうく
おかへうとそまく有馬屋へうとせ〳〵。小豆の粉り蘇香入うる洗
粉饅色ちまれれおうしげあるとを元そへ物くまれい白きを
乃牙れ中と二海ぞうかへうくあうとせ〳〵。おあうりあきるを
ぬ魚やよ入〳〵ゆげきうかうきるくこそ。日を入くれ長月よ鯛
焙そうづけ。夕食あげうあるとと蕎麦八つきめてあくあれ法
用大事れうけるれ長銀色乃ぬさぎんまうきと方事とをそく上
下ぬふれかうつる事ぞうく。とへく。巻三月春夏の外海時ふ
衣裳をまうくら〳〵用料をくまづるーぽどなく対銀のつきぬと

ゐるてをうつ。よいお出入れ石嶋くふ善ゐるゝをすれ万大やう
なほ初りぜんさく。てのさをもを善でゐるゝぬとをひゐるゝもが完
もりげてゐ中く義分代ゐるゝ関東ゐ姫ゐゝ。も弟上善善
乃博町ふ株市屋れ市工業とて有名ゐる町人今世盛乃株
ゐく関係ゐ業れ長振所の題郷姫分代ゐる入てのゐゝ
時代薪絵れゐるゐふ小袖ゐ善れ袖とて立ゐ善のかゐゝ善善絵
織級地ゐゝ廉ゐれ善をゐゝて仕付ゐれゐる。表姫中ゐく文善
乃ゐゝみをかをひてゐをゐけて縮緬かゐりゐゐ。分代ゐく
ゐゐふゐゐゐび廉くれ紅絵縮緬ひゐくゐり日毎れ一門付合ゐま
ふ義をかゐりぬゐれいりぬれ善れゐをもゐゐゐよい紅ゐんゐゐり
あゐゐのふをひゐび。ゐ年ゐ人世俗の一家ゐゐゐかゐゐび世俗

ふせひゐゐゐふ浮世とそ株市屋の姫れ姫よゐやゐそ姫
盛れ美形乃姫でゐゐやふ仕合ゐゐくひゐの出とゐゐれ浮家
乃ゐふて人善ゐふをそかゐく。方市株市屋れやゐゐひれゐゐく
今年十八ゐ人善ゐふをゐれゐ善善れゐゐ善ゐびて箱間之
ゐくゐゐゐゐゐれをゐゐひゐのと伊丹ゐて有ゐる善須れ紋代
ゐゐかゐゐをゐ家れ乳母とゐを代姫れ乃善善乃ゐゐ分
善ゐくゐのをゐれ株市屋ふ立善ふゐふ一人れ姫ゐ善ゐゐ
ゐふゐ引ゐゐ書ゐ月せゐれゐゐ。もゐゐくゐゐひれえんと
姓び。員分れ姫分ゐふてゐゐ。もゐゐくゐゐひれえんと
紋業ふゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ大概ゐゐやゐべゐゐ
ふ善れゐをゐんがゐゐく員よ入ゐゐゐゐと。関係を招ゐ

右のごとくかくうり人形あを容顔さいくをうれあるもんとゝ
ゆるゝ山神をゝとゝうゝ山男姫とかゝて美せくたるれこあれ
ば後やもゝ年おのうゝ山神とゝ仮てうゝが乳母の娘をき
間く御一所方（はなをゝよ出ろをゝ見ゆんゝは入ゆゝみくきれふか
てはゝうゝ。ゆあまいこさうませねとめいまくうゝよゝきれい
おゝうゝ山地赤れこうゝ和とふかのゝ子れねひ入れ山神をとあれど
そゝをゝ仲ゝ妻の法師ゝうまひの時他と酒ゝがらはし
て今とゝはやときてあまこゝ儀れ男ゝは立ゝてゝとゝかくかゝ
ひるひはゝうてゝゆもひゝとせゝゝうゝきゝうめゝく。大まふかき
やゝ山神をあれゝの娘ゝかゝしてやゝうやゝとゝうゝがゝうゝひゝうゝ他ふ法
乃娘ゝ面ゝひゝみゝをゝうゝくゝゆゝさゝふ他ゝ二ゝうゝ子ゝてゝこゝゝ人ゝゝ三ゝ人ゝ

あゝ天柳ごゝうゝゝゝゝとゝうゝせゝてゝうゝとゝくゝゆけと手ゝ手れゝゝうゝ
ゝはゝあゝうゝまゝゝとゝゝうゝめゝてゝうゝゝ山ゝゝゝゝ

世婦
卷
栗毛一代記
太夫
卓袋日

[illegible]
森の時庭の[illegible]乃[illegible]山へ[illegible]
牡丹の[illegible]
つゝ今[illegible]
[illegible]
[illegible]

とゝの神薬を用ゐ衣裳に白紙の一枚をかぶせ
ほど肝ごまを粉くのもねをとわけをせく吟味ちん表者
園をしれ物やぐろうどの花ものをこゝろ
言葉絵の文章に蓋乃をぬぐ奥れ札の入をえて拙をい
当面の内儀ちゝど女房れ乃をを奥物つゝかと身代乃
拙をとうかひろうよをを西国れを大名をゝ表者合の
御用をそ附乃百ふ武乃あをゝ出ゝ内をを若者も判れを
を上手よをかをを上手ゝ女房の物を奥ゝをれぬをゝ
こををひ声をそゝをゝ者ををんさく仕ゝ上まで見
かゞをれくゝとびをゝ姫ゝをんさを上りををゝて色を
ゝをゝまゝをゝを身方でかゝるわざゝ親ををくをぬを

置れるひをゝをを入をゝて後をゝをれい事
色をををてをゝれをゝをを事ゝ上ゝをを内係れ乃を
ゝ金武しかゝ紙ゝ国を人ゝ体せゝをゝ紙ゝ一枚入をゝ
事ゝ物ゝをを酒ゝ所の姉ゝ方を寿聲ゝ小ゝ方ゝ長れ
ゝく夏ゝれ粗乃ゝをゝつき物を紙れゝれをゝと年寄の
ゝをを色をけく物ををくゝを中ゝつきゝひ
ゝを表ゝく。祭ゝれ和ゝ乃女中ゝつきゝ
ゝを人ゝ乃材庵仕ゝ茶屋の表ゝ乃ゝ表者
行ゝ一門乃事を人をを打ゝ行ををゝ。内儀紙ゝ表者
ゝをゝ。新れ日ゝ表者を用と和ゝ粗をゝ扱い
繁昌ゝ働ゝくゝをゝ一生ゝ人ゝ結ゝをゝ

され屠このく自ら洗濯物を作る九月日のつめひとりぐ
おろけて糊つけ物をするしい紙びいなの前ろうくすをさつ
の賀仕事ばかりにかけ物仕事物屠もどとね多どり仕物
ちく残ちつけせるといひさうれ中ひ言うし年ハ
月とてい一日ハいみ一ハおちく一かんを
老母ちの浄瑠璃ょ詞のうひ枝本屋乃娘
国嬢の国ょ行ぬ入乃とりやいひをより娘かさらおくとさて人数
いひまうりれどもぴ娘さで粟をもとひてけらいよりれうぐひを
いいぐうりれいかるとやうれとの人ょうをさふわくどとて親ちる
さげうりとばもぐ茅ょる色ぬうかるとて一ょ粟ちりハ丙午れ
女ハ男をとひけいせい遊女ハ屠く人れ身代をかくちまひ男を

屠大ちりよりとうどう一ぬて婦人のハ乳母ちりて醤書ふも
ちひうちりれ乳病を病ひ醤老ょ桃をもうひ車ちり粟ばうり
くハいとて嫁入させどふ物をうくいとうり親又ちを分とのう
ま容ちくよりて法ちと男ばかんみ世ハだとひ史をうふとまく
嫁れ乳ちく男ととうをくれうれとものちりかちうどかうれをの
ぬうさちりうちうれの娘を物く大事いりけるしちりひ娘の屠く
ぬちりくハ法ちれうを養ちどやと二階ちおいこう繰地摘絵れかを
今時れうり多紙ハいりよちりもりどを侍物ぬ信さハいうれ智恵
つけとまねもりをせと乳ちりて配所れ二階ょ多屠をうハて
ちりがくむさんや湯乳乃豊ょ娘ょ南世乃日のめさハちりを
ちてほる療候やうふちそのけ勝をうんで悔むちやぢ仕組

かゝ様の世まうけ〳〵美相なる男子をもつて世に大くこうと
るゝとゝもの世まうけ万女醜名れゝ〳〵ハとうとこ思ひるゝ。衣
ふ長袖ゝ多くれ乃赤くまゝ。木目山村本屋せ〳〵有法人ゝ裏女美
形面倒乃婦婦田。計づひ入ゝ也ゝ橋ゝ。ゝ考れ仕出ゝ。
光雄とやうにまとめ紅ゝ裏ゝ乃ふ十三かゝれ者婦節。
おまんなむまとひもの〳〵やゝ花車づゝれ抱節ゝまるの三美面衣
乳をつけくゝれゝをかく作ゝ人ゝ見ふゝら示ゝゝ雅俗の
よゝわゝいふ無口中ゝ乃ゝ乃ゝ者ゝ魂をとゝ〳〵ぬゝ始ゝ初めて衣
ゝる事ゝ好ゝまゝ乃ゝ人ゝ附ゝゝ田ゝゝ事ゝ乃ゝ流行をゝ乃ゝ〳〵ゝ
ゝくわゝまゝゝゝれゝゝ乃ゝ出ゝ抱ゝゝ乃ゝ行ゝ乃ゝゝ乃ゝゝ
ゝゝ年ハ形代の三作ゝを作ゝ〳〵ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

作〳〵延の紙ゝ一日ゝ一束づゝ入ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ間のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝゝ事ゝ母親の美人ゝ身ゝ先ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
洞をゝ作ゝゝゝゝ合ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ痛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
うかゝれハ作ひゝゝ者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かゝ洞をこぼして怪び。義礼の妻この日八ツ代よりひ村。大坂中
をありて色門さして来ぬれば。義礼けうろ家をとんせうをまるこの
法義遠。今日何時でござるそと。ぬくさりれ寺をとろせて。ま村
ちよ。義礼のつくまされ。長松寺(四ツ)。義礼の妻ことばなく
おろんれさのしを門花きでるまいろぬ程の怪び。二親も奥をさ
まゝ。おのでく義礼出ようつく。嶋へさせてを聟礼をのい
るものちり。行とを義礼ん。ふ表なゆ。ぬうはて。洞をこぼ
て驚とをまひと。気を薄ぬうしあらふく義州せる
きは。きうこれ美礼をとろひて義礼嶋へまるぬゝ。ま都のへ
大坂礼死さ人れ亦へ来を坊ひよやつく下されとあるを。乳母ゝ
中ゝ人へく。夫生寺れ神子町ゝく内儀を彩ま。ぬふん海乃

きばをやうにはのせまそれ法蓮ゝくトさんとやゝく神子
乃口のせて義礼をゝく。毎日神子町(四ツ)。家一門いふ
にあゝとみ義礼の同じ家机を掘けうろ人を言ゝしては
をとせく洞をこぼしけうゝ義礼法どふきゝくとまを屋うゝ義
ふかゝ洞ゝまばれぬとゝ。ぬゝをゝ程の法蓮法
ゝを嘗ゝ。親れ乃法蓮ゝとゝ。ぬゝやとひるゝあきゝとゝく義
嶋をぬゝで洞ゝまばをとゝ乳のつれゝゝ。老功の法考ゝ考
て。益乳湯ゝ和藏ゝとゝつてゝる法どゝゝ。洞きうるゝ。祝
云ゝて男をとゝをせゝ夫のゝ和ゝゝをゝ事をゝゝ。
一門悔合きゝく言義橋ゝ紙屋(編ゝつゝ約来行程洞こぼさ
まゝそゝ。商義ゝ紙屋ゝれゝゝひの和と。吉日をゝきをり

けうふ。白丸の神よ御願ひ申さうと思ふて。
紙に書きて。
れを果たされて。戻りの世に。白く附かうと。
やとそろくと。涙をぶ〜とあふれ。
涙のつゝく出れ。袖を。門出焼くと。声をくつのぞ。
門出をあらはかけく。おるぐさみよなかまーてやうと。
紙屋に。待女に花とかざりてあるこのうりぐそ。
もくれをぞうみて。奥方を。入くを。
奥福をうー。
代をもれ白びく。
嬢れの。
あるく出れ。
おてを助れ。

掃除せてるく。年寄を。
てかるーをさると。
音中れ。
れあり。
かつ。
つをの。
もびいてと。
やうれそろくと。
まそ。
つるーを。
れ。
れ。
れ

解ハさぶく立まさるとく生れつきの事なれはよりこと
言後まろかをきまでと云事なり酒
ふ婦ゝうる事なりと。古代は世間出入は傍先ふとうも酒のるる者
どもをのびあつめ問絶をひらきうをとどいぶん世間先みをもうの問
うをうけく酒ともあ婦さうるを時うかゝうむきうて笑ひ出しく。
うまこい事をもうしひ事れ物ゝうへてんろう癖治ろをもたるよひ
つめく物かゝ晩まで酒事ふるく法出しさるれいなるらぬす
ひろまこをとうく接をめへて多ゝく見されい姫ハ春よあろ
て法事は酒ゝるろ出婦上戸へとけうる而を和信は世元義と夫事と
多ひけくつゝ多ひは方へんをかゝひの法ほゝ法事多ひ終
ゝく。多事は法師大ゝ多ひふるて親を姑聟は恨ひ嫁を

并はゝふまうゝへ法事上戸をもるをさんと祝ひかゝうも
まゝるそゝ出度れくうまひゝまるる時酒ハのをて薬硫ふて
ひけむゝふ多ゝくれろるるてをのゝゝひとをもく宣癖やを
てゝゝくひあるゝをゝやるゝ拔ひ自作亂ちん
ゝれ猪銅と富問は世入をのを拔ひあるる時前置あるを
世のまを乗けりくゝを事ひて。銭自儀は特癖の前癖ゝ義
滅事は強もゝく出今法隙法と見へまれいをゝく法出あをひ
ひ世ひゝひと毎こひをまれまをと長形の作付れとゝをもあとゝこに
せゝこ切てゝくれへ婦法ハをもとゝのくむゝをゝ人一信をもるゝ
あと。今ハひゝとゝの物ゝうかゝくも祝事まかくゝるゝを事ひとを
とゝを毎くむ出ゝをれおゝをゝるゝ作かくゝ自ハをれ物ゝと高ゝ永思ゝ

今のもおもてあるれすぐさまれたりてさびしひとそのいきをつて伝
あるくあるくといふくきもとをとへばあるくたあるあるとも
ををあるくるるへいもいけるかり発ひれ恨てこぎるまるあるのをも
ものかるこびともちやくくおやとせりうまいパテやうあひあるる
のほをのぐおれるぐちるとかさきんうふるうはをんをあること
ひとあるくるうるうるかとをもをうはくあるるでるへいるるかるる
へいるれ書ちる極楽で年とうくこぎるくをるへ仰ぐるう
おぐうひさうの猪鍋いちひさうるうと鍋も再度でいるさそうあと。
書れるようのるくあるあるやるうたまるぬやどおるるふるぬ
まへうこるやうるもかんまんるるるると暗をかへくく大勢ひる代
まるる系統とあるくもへあるるり懶年由へ年るるれるくるるとか

ぼくりくおるれるみぐをとう和ちるんまづちんをまづちられると制
をれへ舞へひやうとをとうくちるくまるりまるまるくきづか
ひをるれる。女どもへ和気もいるきあるうもひれ拍病の療治のき
いくあれるるひ書性乃いのりるまやと。舞をあんまりでるう
ひるるひをるて。まづひきびへあるるふとるくそるんるるて注まくく
かるるくいるあごひとうをるるべし。かうるくふ方あるやへの死よ
ぐへるる。あるるれる事るる帰とれるをるるるる自惰と

せるれ無

世間娘容氣二之巻　終